

里づくり

第14号 2017年3月

編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課

〒060-8588 札幌市中央区北3条西6丁目

TEL 011-231-4111 / FAX 011-232-4128



新米でこうじを仕込む
写真提供：日高町 田中義光 アドバイザー

CONTENTS

地域づくりリレーインタビュー

小樽市 田中酒造株式会社 代表執行役員専務 岡田 栄造 さん

北海道里づくりアドバイザーレポート 岩見沢市 小西 泰子 さん

新任アドバイザー紹介

BOOKS

トピックス

一人に学び、地域に学び、今できることから始めるー



今回、お話しを伺った
代表執行役員専務の岡田栄造さん

洞爺湖町出身。実家は老舗の菓子店を営む。
酒造りと菓子づくり両方の経験を活かし、
地域の様々な商品開発に携わる。

―田中酒造の特徴などを教えてください。

田中酒造は明治三十二年に創業し、今年で百十八年を迎える小樽市の老舗酒蔵です。

北海道で唯一、年間を通して酒を醸造する四季醸造を行っており、約二キロリットルを五十週間、毎週仕込んでいます。

製造量は年間約百キロリットルで、その量は北海道で最小の酒蔵です

製造量が少ないこともあり、販売は田中酒造本店と亀甲蔵での直売が主です。

主なお客様は観光客の方で、年間約二十万人、その二割は海外からの観光客です。

四季醸造のため、どの時期に来ていたとしても、酒造りを見学することができます（要予約）。

平成十年、道内の酒蔵は水以外の原料を本州に求める中、現在の四代目当主である社長が本物の北海道産地酒を目指し、「北海道産原料百パーセント」を掲げ、現在も北海道産の原料にこだわる酒造りを実践しています。

平成十九年の全国新酒鑑評会（独立行政法人 酒類総合研究所主催）では、ニセコ町産米と小樽市の水で仕込んだ「大吟醸宝川」が金賞を受賞しました。

小樽市以外の地域との関わりも深く、苫小牧市の水と厚真町の米を使用した

「美苦（びせん）」や、音更町の米と水を使用した「十勝晴れ」など、地域と連携して様々な地酒を醸造しています。

また、日本酒以外にも、梅やブルーベリーなど余市町・仁木町産の果実を使用した「小樽美人」を製造し、日本酒の苦手な方や海外からの観光客にも喜ばれています。

酒米は主にニセコ町から仕入れしており、毎年、当社社員が生産者を訪れ、田植えや稲刈り体験をさせてもらっています。

酒造りには米が重要ですから、どのように米がつくられているのかを知る体験は貴重でありますし、作業の後、パーベキューを食べながら生産者の方と交流できることも楽しみにしています。

また、米生産者さんが酒蔵を訪れて、今年の米の出来について、ご質問を受けることもあります。

―数多くの地酒を製造されていますが、きっかけはどのようなことからですか。

きっかけは、苫小牧市の「美苦」を手掛けるようになったことからです。

北海道中小企業家同友会の会合に社長が講演に何度か呼んでいただいたことから、そこで苫小牧の地酒を造りたいとお話しをいただきました。

当社では、最小ロットが千リットルからと、少量醸造が可能なことと、年中酒造りを行っているため季節を問わないということから、地域とのニーズが合うのだと思います。

基本的には、地域から商品開発のご相談をいただくのですが、依頼は、食品加工研究センターを通じてお話しをいただくことが多いですし、こちらからもセンターにご相談し、連携しながら進めています。

やはり、「こんな少量を頼めるのは田中酒造だ」となるようです。

最近では、日本酒に限らず焼酎、果実のお酒、お菓子までご依頼をいただくまでになりました。

ご依頼いただいた商品は、原料を地域から購入し、出来た商品は全て発起人である依頼元に納入していることから、地域で消費していただくことになるのですが、少量を造るとなると販売額がどうしても高くなり、普段家庭で飲む酒としては割高になってしまいます。

そうなるので、お土産用の用途が主になりますので、観光需要が見込めるか、道の駅などである程度の販売の目途が立つのか、どのように付加価値をつけるのか、ということが商品開発を検討するに当たり重要となります。



田中酒造亀甲蔵

また、地域企業などが発起人となるなど、地域の酒を根付かせようという、地域からのバックアップが必要だと感じます。

せっかく、地域の発起人が企画して造った地酒ですので、地域の中で知ってもらわないと買っていただけませんし、買っていただかないと、また来年も造りたいというご依頼にも繋がりません。

酒造りは当社が行いますが、商品のネーミング、ラベルのデザイン等は基本的には発起人で行ってもらっています。

特に商品のネーミングは、地域の人が分からない地名や思いがありますので、必ず命名をお願いしています。

また、地域のプロジェクトチームに、女性の参加があると良いものが出来るようになります。



清酒の醸造

「地域での商品開発に携わることへのメリットはありますか。」

地域での話題づくりに貢献できる、ということだと思います。

少量の製造となりますので、経済的な効果を大きく生み出すことは難しいです。

しかし、商品が話題になることで地域や生産者が明るくなりモチベーションが上がれば携わった我々も嬉しいですし、商品が話題になり、当社で造っていることを知って酒蔵に行ってみよう、と思っただけの人が増えることで、当社もブランド力が高まるところがメリットだと思っています。

また、小さくても様々な商品開発に携わることにより、若手社員も良い経験を積めますし、自社商品開発にも参考になる部分が多々あります。



蔵には販売所も併設

「今後の展開について教えてください。」

当社は、少量生産で地域の原料にこだわって酒造りをしているので、これからは、細かいところに気を配れる少量生産ならではの酒造りをしていきます。

こだわっているとは言え、少量生産の酒をただ造って売れませんので、ラベルにこだわったり、商品の背景にある物語を見せるなど、商品の魅力を高めるための小さな積み重ねをしながら、地域の原料を活かし、地域にも、買ってくださるお客様にも喜んでもらえる商品づくりをしていきたいです。

夢としては、お客様も生産者と一緒に田植え、稲刈りをし、酒が出来るまでを共に体験できるような取組ができれば良いと思っています。

田中酒造の商品は生産数量が少ないことから、自社直販を中心に販売されています。

webサイトでは、清酒「宝川」や、新鮮な酒粕から作られた「甘酒」、北海道2014「北のハイグレード食品+」に選定された、飲んでも美味しい本みりん「魔法の一滴本みりん」などが購入できます。

<http://tanakashuzo.com/>

田中酒造

検索





岩見沢市 小西 泰子 (こにし やすこ) さん

- 1989年 農産物直売所「ふる里ふれあい店」代表
- 2013年 北海道女性・高齢者チャレンジ表彰事業最優秀賞受賞
- 2015年 「北の大地マルシェ」代表
- 2015年 北海道ふるさと・水と土指導員



北の大地マルシェのイベントや旬の野菜情報を掲載しています！

Facebook→ <https://www.facebook.com/kitanodaitimarushie/>

地元で生まれ地元で育つ

現在の岩見沢市北村、市町村合併前の北村で生を受ける。

私が生まれた昭和三十年は、戦後、定住地を求めて開拓団地に移住して間もなかった頃だった。

幼い頃は、人とのふれあいより、土や植物のふれあいの中にいたように思う。種を撒き、育て、収穫した農産物を、

井戸の水を汲み、薪や石炭で起こした火で調理し食べる毎日であった。

そして、道端の木いちごや野ぶどうを摘み、鶏や豚や牛や羊やうさぎを飼い、動物たちのために道端の草を集る日常が楽しくもあった。

昭和四十六年、今から四十五年前の事水田地帯だった北村に初めて「たぐね」という小麦が導入された。

実った小麦の黄金色に魅了され、初めて北村の景観が四季折々に美しいことに気がついた。

昭和五十年、地元の農家に嫁ぎ今年で四十一年になる。

農産物直売所「ふる里ふれあい店」開店

平成元年、自宅敷地内に無人直売所「ふる里ふれあい店」を開店。

平成十一年には、もっと地域の農産物の魅力を伝えようと漬物加工室を併設し、漬物加工に取り組み、平成十二年には有人化した。



二千元おまかせ野菜セット

また、生産者と消費者をつなぐランチ交流会や、畑の小道を歩くフットパスイベント、知的障害者施設や高齢者施設での園芸福祉活動、保育園園児などの食農体験受け入れ、地域をつなぐふれあいマップ作成などを手掛けた。

地域の学習組織FAM協議会の発足

平成二十三年、地域活性化にむけた組織として豊正FAM協議会が発足された。

農産物の直売、加工、交流活動の取組を推進する豊正FAM協議会ふれあい室の室長に就任し、地域ぐるみの視察研修会や学習会を展開した。

同年、顧客や異業種に地域の農業を知ってもらうため、「ふる里ふれあい店」との共催で、農村の小道を歩くフットパスイベントであるピクニック交流会を開



地域をつなぐふれあいマップ

催した。

この取組は、平成二十四年から豊正FAM協議会の地域での取組と位置づけ、毎年開催している。

また、野菜ソムリエ畑ツアー受け入れや、地域の特産である落花生のレシピ集作成や落花生ランチ交流など、多彩なイベント活動を行っている。

これらのイベントによる異業種や顧客との交流により、地産地消に取り組みレストランが定期的に野菜の買い付けに来るようになり、また、落花生イベントに参加してくれた加工業者との間で契約栽培が行われるなど、様々な効果が現れた。

また、地域参加型のイベントとしてメディアに取り上げられ、地域農業をPRする機会ともなった。

地域マルシェ「北の大地マルシェ」開店

平成二十七年、地域直売所の立ち上げ構想があり、二十七年間継続した農作物直売所「ふる里ふれあい店」を閉店した。閉店には、地域人口の減少や、地域の農地が遊水池計画により国の買い上げとなり、今までの生産者が移転と離農を余儀なくされた現実もひとつの要因になっている。

しかし、翌年の平成二十八年には、JAいわみざわ大富の生産資材空き店舗を利用し、豊正FAM協議会の運営で、加工所とコミュニティカフェスペースを併設した地域マルシェ「北の大地マルシェ」を立ち上げ、新しい一歩を踏み出した。

関係機関の支援

豊正FAM協議会ふれあい室の活動



フットパスで麦畑を歩く



野菜ソムリエツアー



幼稚園児による落花生収穫体験



北の大地マルシェ

や「北の大地マルシェ」の立ち上げには、様々な関係機関の支援を受けている。

市町村、JAからは農産物消費拡大推進協議会助成金の活用支援やイベントの開催協力、PR活動支援など、農業改良普及センターからは栽培技術、販売促進活動や交流活動の企画・運営支援など、道からは北海道中山間地ふるさと・水と土保全対策事業の支援を受けている。

今後の活動

個人経営から始まった直売所での地域農産物普及活動は、「北の大地マルシェ」として豊正FAM協議会組織運営の直売所として活動を継続することとなった。

「北の大地マルシェ」は、落花生と新しい野菜を商品の軸とし、次の5つの柱を中心に展開したい。

①直売、②加工、③カフェ&サロン、④落花生オーナー制度や落花生祭り、フットパスなどの交流事業、⑤地域を繋ぐふれあいマップや旅行会社と連携したバリアフリー観光などの農福連携事業である。

店舗は、車椅子のお客様をスムーズに受け入れできるようにスロープ・バリアフリートイレを整備するなど、来る人に優しい直売所を目指しており、人の交流と地場農産物のPRを目的としたカフェ事業を展開したい。

農家・非農家・異業種の活動連携は、地域農業のPRにもつながり、これからの農業のあり方を考える一歩であると考えており、現在行っているイベントを中心とし、更に活動の幅を広げたい。例えば、近郊のラムサール条約登録湿

地である宮島沼や、空知リゾート北村温泉などの観光地、園芸療法の庭バリアフリーガーデンとの連携を行うなどで、連携充実を図りたい。

「北の大地マルシェ」は、高齢等により農業を辞めても、農に触れ、落花生や新しい野菜などの園芸作物を作りながら、人の受け入れや収益を目指す拠点であることを目標に、五年から十年のビジネスプランで、限界集落にならない農村づくり・魅力ある地域づくりを目指したい。

地域に人を呼び、北村の農業を知ってもらいたい、美しい北村の農村景観を見てもらいたい。

そして、住みよい農村で地域住民と老後を過ごしたいと思う。

今年度、新たに6名が北海道里づくりアドバイザーに加わりました。



小平町
高野 幸子さん

留萌管内小平町で水稻・畑作を中心に農業を営む傍ら、JA北海道女性協議会の副会長を務め、食農教育や男女共同参画等の活動を行っております。
また、小平町産小麦を使用したパン作り等の活動も行っておりますが、アドバイザー就任を機会に他の地域の活動を学んでいきたいと思います。



中富良野町
久保 照美さん

十勝岳連峰を眺めフレンダーを育て多種の花を植えドライフラワーにして販売しています。
美珠・富良野農村ホリデーネットの会長を務め交流を深めています。アドバイザー就任により全道の活動を学び、より充実した活動にしたいと思えます。よろしくお願いたします。



清里町
柳谷亜紀子さん

農業を営む傍ら、ファーマーズキッチンTOKO TOKOを平成二十四年にオープン。自家製玉ねぎ肉まん「玉ちゃんまん」や、じゃがいも焼酎を練り込んだ「焼酎ケーキ」などを販売しています。
アドバイザーの活動を通じ、新たなアイデアを見つけていきたいと思います。



興部町
仲元寺恒平さん

JA職員として地域農業の振興に携わりながら、商店街での「おこっぺ街中マルシェ」や、町民同士の異業種交流会などの企画や運営などを行っています。
アドバイザー就任により多くの方との交流により、そこで感じたものを地域に発信していきたいと考えています。



雄武町
石井 恭子さん

耕作放棄地を再生した農地にて韃靼そばを生産し、乾麺や焼酎などの加工品の販売までを手掛けている(株)神門にて商品開発を担当しております。
アドバイザー就任により皆様から刺激を頂きながら、さらに魅力ある商品開発を目指します。よろしくお願いたします。



興部町
八木 実央さん

おこっぺの宝はオホーツクの豊かな自然と地域を愛する人たちです。
町職員を務めながら、地域の「宝」を感じられるきっかけづくりをしたいと考えています。
アドバイザーの皆さんとの交流で得られる活力をおこっぺに届けたいと思えます。よろしくお願いたします。

指導員会 幹事会

平成二十九年一月二十五

日に開催した指導員会により幹事が改選されました。

来年度は十二名の幹事で研修事業を進めていきます。

会長

小野寺孝一 (当麻町)

副会長

阿岸 哲広 (石狩市)

小林 石男 (八雲町)

服部 政人 (鶴居村)

幹事

外山 陽一 (雨竜町)

田中 義光 (日高町)

宮崎 渉 (森町)

吉見 俊彦 (上ノ国町)

岩永かずえ (南富良野町)

白府勝三三 (苫前町)

馬淵 陽子 (北見市)

神 義宏 (豊頃町)

道東ブロック

- 平成28年6月16日～17日 帯広市、浦幌町
- 特別講話 女性から見た地域づくり
ハーブンマージュ代表 服部佐知子 氏
 - 活動報告 鶴居地区の活動について
服部政人 アドバイザー (鶴居村)
 - 現地研修 ラズベリー栽培日本一の取り組み
高橋 徹 アドバイザー (浦幌町)

道北ブロック

- 平成28年8月1日～2日 南富良野町
- 特別講話
南富良野まちづくり観光協会 副理事長 福嶋孝志 氏
南富良野町地域おこし協力隊 太田達也 氏
南富良野町森林組合 参事 池部英明 氏
 - 現地研修 木質バイオマス施設見学

道央ブロック

- 平成28年8月24日～25日 喜茂別町
- 特別講話
地域活性化に向けた地域おこし協力隊導入への思い
喜茂別町副町長 内村 俊二 氏
 - 元喜茂別町地域おこし協力隊からの活動報告
岩井 真 氏・山下 純 氏
 - 現地研修 自宅を解放しての地域との交流
宮本弘夫 元アドバイザー
 - 喜茂別町鈴川地区住民との意見交換

道南ブロック

- 平成28年11月10日～11日 八雲町
- 活動報告 ファームネットやくもの活動状況について
小林石男アドバイザー
 - 活動報告 フロムネイチャーファームの取組について
フロムネイチャーファーム 代表 梶田とき子 氏
 - 事例紹介 熊の木彫り活動等について
熊木彫り講師 千代昇 氏
 - 地元食材を活用した商品開発について
服部醸造株式会社 専務 服部由美子 氏

道央・道南・道北・道東の各ブロック幹事が中心となって開催したブロック別ミーティングは、地域ならではの課題を検討し、情報交換を行うことで、より地域を理解し更なる地域活動を活性化することを目的としています。
来年度も実施しますので、アドバイザーの皆様のご参加をお願いします。



道東



道北



道央



道南

BOOKS



都市と地方をかきまぜる 「食べる通信」の奇跡

著者：高橋 博之 発行：光文社

東北の農業や漁業の現場を取材したタブロイド紙と、野菜や魚などの生産物をセットで届ける新しいタイプのメディア「東北食べる通信」の編集長が、「地方だけではなく、都会も問題を抱えている」という考えの下、お互いが食を通じてまがりあうことで新たなコミュニティや関係性を構築することを提唱する。

これからの都市と地方、農業・漁業、情報社会や消費のあり方について再考させられる一冊。

地域づくり研修会を開催しました

平成28年9月29日（木）に札幌市において、平成28年度地域づくり研修会を開催しました。基調講演では、北海道開発局環境アドバイザーなど景観に関わる数多くの公職を務める、中井景観デザイン研究室の中井和子代表から「魅力ある農地・農村景観を考えるー風景を感じる目・見る心ー」と題して、お話しいただきました。また、ひまわりによる地域づくりを行っている北竜町ひまわり観光協会事務局の南波肇さんから、「ひまわりによるまちづくり」と題した活動紹介をしていただきました。研修会には59名が参加し、皆さん熱心に耳を傾けていました。



現地研修を行いました

平成28年10月6日（木）～7日（金）の日程で現地研修を当麻町、旭川市、剣淵町、名寄市で行いました。研修では、「食育・木育・花育」をまちづくりの目標として掲げる当麻町が自治体で初めて直営圃場を取得し、子ども達が田植えから収穫を体験する「田んぼの学校」や木育の拠点施設である「くるみなの木遊館」の取組、剣淵町の青年がもっと町の名を広めたいとの思いから始まった「絵本の町」としての取組、名寄市風連町で栽培されるもち米の特性を活かした商品開発や六次産業化の取組について、お話しをうかがいました。

指導員会を開催しました

平成29年1月25日（水）に札幌市において、平成28年度北海道ふるさと・水と土指導員会を開催しました。活動紹介では、浦幌町の高橋アドバイザーから、ブルーベリーを活用した六次産業への取組や地域での商品開発することへの課題について、また、雨竜町の外山アドバイザーからは、道央ブロックミーティングで訪れた、喜茂別町の地域おこし協力隊を地域に定住させる取組から、地域に人を呼び込むための検討について発表がありました。活動紹介を受け、グループ毎で話し合い、討議結果を発表しました。



今後、里平地区の豊富な農産物と組み合わせ、日本食に欠かせないこうじで地域食を発展させるため、奮闘中です。

飯寿司、漬物、味噌用と年間三十俵近くのこうじを仕込みます。今後、里平地区の豊富な農産物と組み合わせ、日本食に欠かせないこうじで地域食を発展させるため、奮闘中です。

日高町で百年以上続くこうじ店の製造方法を地域に残そうと、里平地区の「食楽カモミールの会」がこうじづくりと地域でとれた農産物を活用した取組を行っています。

表紙紹介